

ならべてわかる 本物のひみつ 実物とレプリカ

博物館では、展示品の情報は

キャプションやパネルから得るのが一般的ですが、この展示室では、実物展示に加えてレプリカや再現文化財も活用することで、鑑賞の幅をさらに広げてみようとしています。火焰型土器の断面模型から作り方を想像したり、銅鐸の響きに耳を澄ませたり、仏像の断面の年輪から一木造りの技法を理解するなど、作品を様々な視点から楽しむ方法をご紹介します。「ふしぎだな」「なぜだろう?」「もっと知りたい!」といった新たな好奇心が刺激され、豊かな想像の世界が広がっていくことでしょう。



新しい発見を楽しみながら、作品を鑑賞してみませんか?



鬼瓦を下から見上げてみよう!



魔法のナイフで切ってみると...



ならべてわかる 本物のひみつ

じつぶつ 実物とレプリカ



母並の如く...
ふしぎな文字は何と書いてある?



大宰府



火焰型土器



あなたなら

●●型土器にする?

縄文時代 5,000年前~4,000年前
新潟県津南町教育委員会
土、高21cm・最大径25.5cm

■炎のほかにも何がイメージできる?
断面や様々な方向から、立体的な形がどのように作られているか考えてみよう。
あなたなら、中に何を入れて使う?

鳴らす銅鐸と飾る銅鐸



弥生の響き



弥生時代 前2世紀~後1世紀
九州国立博物館(左:坂本五郎氏寄贈)
青銅、左:高41.3cm・幅26cm・奥行16cm、
右:高109.5cm、幅54cm、奥行41.8cm

■弥生人は銅鐸の響きをどんな思いで聴いていたのかな?あなたならどんなリズムで鳴らす?下からのぞいたり、表面のギザギザの模様は何を表すかを想像してみよう。

重要文化財 鬼瓦



大宰府を見守る目力

奈良時代 8世紀
九州国立博物館
土、高48.7cm、最大幅約37cm、厚さ5cm~16cm

■鬼瓦を下から見上げると、表情はどのように変わるだろう?目力の強い鬼瓦の表情にも挑戦し、人々を何から守ろうとしていたかを想像してみよう。



1000年前から座っています

平安時代 10世紀
九州国立博物館
木(ケヤキ)、
高56cm・幅41.6cm・
奥行32cm



阿彌陀如来坐像

■断面の年輪から、一本の丸太から全体を彫り出しているのが分かります。ふしめがちな穏やかなお顔で座り続けて約1000年。どんなことに想いをめぐらせているのだろう。

銅印「大宰之印」(再現文化財)

九州国立博物館
銅、高7cm・印面縦6cm×横6cm

こんな服を着て、
大伴旅人が使ったかも!?



大宰府長官の服(レプリカ)

九州国立博物館
当時身に着けるものには絹や皮などを使用

■丸みのある字体が特徴的な印、現代のハンコとどこが違う?文書にはなぜ、同じ印がたくさん押されたのだろうか?着物や帽子、ベルトも現代の物とくらべてみよう。



令和2年 9月8日(火) ▶ 11月23日(月・祝)

九州国立博物館
4階 文化交流展示室 第7室

